

「専大スポーツ」の歩み 1961年～2004年



1961(昭36)12月・第1号



1978(昭53)創立100周年期年号



1982(昭57)12月・第42号



1981(昭56)1月・第33号

1961年(昭36)に体育会から「専修スポーツ」がタブロイド版4頁で発行された。以後、課外体育課、体育会本部が協力しながら担当している。第12号では硬式野球部大学日本一などビッグニュースを提供し、74年(昭49)には体育会40周年記念特集号を発行。不思議なことに第24号は72年10月・73年4月・75年4月の3回も発行されている。この間、発行回数は年間2・3回。タブロイド版とブランケット版混同の4頁から8頁建てで、第30号から「専大スポーツ」と改称している。

92年(平4)からは、体育会本部に籍を置く「情宣局編集部」の学生団体が中心となって編集を手がけるようになった。密着取材により各部の活動状況がリアルに反映されるようになったことは喜ばしい。アマチュア記者たちの奮闘は専修大学体育会の発展を支える大きな力となっていることは確かである。また、97年(平9)からは、タイムリーな情報提供や読者層の拡大を目的に「ニュース専修」と合併し、スポーツ面の充実をはかっている。



1991年(平3)12月・No.95



1994年(平6)12月・ニュース専修第293号



(平5)11月・No.103号

1993年

“黄金時代”を築いた 黒岩彰さん(昭59商) カルガリー冬期五輪メダリスト

400号ですか。早いものですね。私が大学1年次の真駒内選抜で優勝したときは134号でした。当時のスピードスケート部は、先輩に竹下正範さん、羽多野純司さん、松本修さん(以上、昭58商)、同期に石井和恵さん、土屋誠くん(以上商)が、翌年に濱谷公宏くん(昭60経済)、戸田金作くん、丸山一夫くん、黒岩栄治くん、土屋一子さん(以上昭60商)らが入学し、まさに専大黄金時代でした。

「ニュース専修・専大スポーツ」の紙面を常に賑わせ、個人的にも何回かの日本新やサラエボ冬季五輪、2度の世界スプリントでの総合優勝、カルガリー冬季五輪での銅メダルまで現役時代、卒業後も大いに掲載していただきました。

いまもスポーツ界に身を置いています。今後も「ニュース専修・専大スポーツ」が大学の発展に貢献してくれるものと願っています。(西武ライオンズ球団代表付チーム担当兼広報部長)

---

輝く体育会復活を望む 岩崎哲久さん(昭62法)

専大体育会はいま試練の時を迎えています。むかし専大は各競技でトップクラスの実力を有し、学生を引き付ける強さと輝きを持っていました。

学生もまた、専修人としての“一体感”を持って体育会を応援していました。

私も、ラグビー部の応援で沸き起こった“専修コール”で感じた一体感は、今でも忘れられません。二部となったラグビー部の試合に、今なお多くの校友が駆け付けているのは、その時応援を通して経験した“専修人としての血潮”が騒ぐからだと思います。

今、体育会は輝いているでしょうか。バスケットボールなど力強い活躍をしている部もありますが、全体としては残念ながら低迷の感は否めません。

体育会は専修人の血潮を騒がせる強さ、輝きを取り戻して欲しい。今の学生たちも全学が一つとなる応援を経験することにより、専修人としてのアイデンティティを高揚させて欲しい。それが専大の伝統の強さ、「専大スポーツ」の充実につながると思います。

---

「専スポ」が選手の励ましに 体育会本部情宣局専大スポーツ編集部 初代編集長 新田範善さん(平8経営)

体育会がこんなに低迷した時期があったのでしょうか。私の在学中は、箱根駅伝の入賞、尾曾武人さん(相撲部出身・元大関武双山関)のアマ横綱獲得、五輪での堀井さんらスピードスケート陣の活躍などがあり、専大スポーツ編集部では激闘の模様を「専大スポーツ」紙上で伝えてきました。

活躍する選手を取材し記事にすることは、非常に楽しく興奮し、専大の看板を背負う選手達に誇りを感じました。

文章や写真の技術も大事ですが、選手やチームへの思い入れが取材には重要だと思います。そうすれば激励を込めた叱咤も紙面で出来るはずですよ。

編集部の皆さん、もっと選手に入れ込んで、良い記事を書き、良い写真を撮って下さい。皆さんが作った新聞で励まされ、頑張る選手が絶対にいると信じています。

体育会と共に「専大スポーツ」を向上させ、「ニュース専修」の紙面を奪え!!

【ニュース専修1月号10面】